



明治大学

黒耀石研究センター ニューズレター

Center for Obsidian and Lithic Studies News Letter

No. 10 November 2018

●2018年の開催事業

◆シンポジウム「神子柴系石器群：その存在と影響」

神子柴遺跡発掘60周年を記念したシンポジウム「神子柴系石器群：その存在と影響」が9月29日・30日に長野県伊那市創造館において、同館と八ヶ岳旧石器研究グループ、明治大学黒耀石研究センター、上伊那考古学会共催で開催された。

9月29日(土)は、シンポジウム基調報告として、「神子柴系石器群の石器石材」中村由克、「神子柴集団の石器製作技術」大場正善、「神子柴遺跡再考」栗島義明、「東海地方における非神子柴的世界」池谷信之各氏の発表があった。

9月30日(日)は、「北海道における神子柴系石器群の存在性」中沢祐一氏、「神子柴遺跡とその石器群」堤隆の基調報告があり、佐藤宏之東京大学大学院教授による「神子柴遺跡はなぜ残されたか」の記念講演がなされた。

このうち黒耀石研究センターからは、中村、栗島、池谷、堤が発表を行った。午後はパネルディスカッションがなされた。当日は1958年の神子柴遺跡の第一次調査に参加された御子柴氏や、遺跡発見の端緒となった黒耀石石槍の発見者である北原氏のご家族にも参加いただき、この貴重な石器群発見時の臨場感あふれるお話も伺うことができた。同館には国重要文化財の神子柴遺跡の石器全点が展示されており、50年前に発掘された日本一とも称される実際の石器を目の前にして、神子柴遺跡の石器群の製作技術や遺跡の性格などを巡って、2日間にわたる活発な議論がなされた。

(堤 記)



シンポジウム開催風景

〈目次〉	
◆2018年度の開催事業	1
◆新メンバー紹介（栗島特任教授）	2
◆センター員の研究成果の紹介	2
〈須藤隆司・大工原豊・能城修一・栗島義明〉	
◆開催予定シンポジウム	4
◆編集後記	

◆シンポジウム「国史跡が拓く縄文の世界Ⅲ ～真福寺貝塚と縄文後晩期の社会～」

今年度で3回目を迎えた黒耀石研究センター共催の国史跡を巡るシンポジウムが、10月7日に明治大学で開催された。シンポジウムでは当黒耀石研究センターと研究連携を進めている、さいたま市が継続的に調査を実施している真福寺貝塚を取り上げた。最初さいたま市教育委員会の吉岡卓真氏が現在、整備調査を実施している国史跡真福寺貝塚遺跡の概要や特徴、これまでの調査成果等を紹介された。能城修一氏からは真福寺貝塚を中心とした縄文時代後・晩期の古環境や植生の変遷、そして縄文人による森林資源の管理についての発表があり、阿部芳郎氏は後・晩期の土器群に見られる型式変化を丁寧に解説し、粗製土器と精製土器の分化背景を食料資源の加工技術と結びつけた見解を示された。米田穰・覚張隆史・阿部芳郎の3氏は土器内面付着物の同位体分析の成果に基づき、時代や遺跡立地によって動物食や植物食のいずれかに偏在する傾向が在る、との興味深い研究成果を紹介した。



シンポジウムの総合討論風景

安定同位体分析は従来人骨の古食性分析として利用されてきたが、近年では土器付着物への応用が試みられ、興味深い成果ががりつつある。こうした先端的な研究が遺跡の保存と活用に関与することを広く周知することも重要である。

遺跡を巡る研究が、出土遺物の詳細な分析・検討に依拠しなくてはならない点について多言を要しないが、遺跡環境の復元や最新の研究方法から土器の用途や内容物、当時の食性までが復元可能となる期待を抱かせる意義深いシンポジウムであった。

センターからは阿部・米田・能城の参加があった。

(栗島 記)

●新メンバー紹介

栗島 義明 特任教授

本年4月から黒曜石研究センターに特任教授として着任しました栗島義明です。これまでは主に公立博物館の学芸員として、考古・歴史関係の展示や資料管理等に従事してまいりました。今後は黒曜石研究センターで専門分野の最新研究に従事されている研究員の皆さんと最先端の分析成果に学びつつ、黒曜石を始めとした石材や様々な生活資源と先史時代の人々との関わりについて掘り下げて行くと共に、学内外への情報発信も続けていきたいと考えています。

専門は旧石器・縄文時代で、学生時代からナイフや石槍、細石器など石器の魅力に取りつかれてきました。その影響もあってヒスイやコハクなど貴石製装飾品、果ては古墳石室の石材や民俗例



に見られるトチの皮むき石にも興味を持つようになりました。最近では縄文時代の木製容器や低地部に設置された水場の木組遺構などに関心があります。今後は先史時代を資源利用という観点から見直すことを新たな研究目標としますので、どうぞ宜しくお願いします。なお趣味は温泉巡りと世界遺産を訪ね歩くことです。

●センター員の研究成果紹介

「男女倉黒曜石原産地遺跡群と旧石器時代の技術革新」

須藤 隆司

男女倉遺跡群は、本州最大の黒曜石原産地である中部山岳地帯の霧ヶ峰高原に形成された石器製作遺跡群である。男女倉谷の河川では石器の材料となる良質な黒曜石が豊富に存在し、段丘上に多くの石器製作遺跡が残された。

信州ローム研究会は、1957年から1960年において5遺跡（第Ⅰ～Ⅳ、みつけ沢地点）の発掘調査を実施し、1972年に概要報告書「男女倉－黒曜石原産地地帯における先土器文化石器群」を刊行した。男女倉型石器と呼称された旧石器時代の技術革新を示す特殊な石器製作が行われていたことが明らかにされたが、数万点

に及ぶ資料の全容は公開されず、信州大学医学部第二解剖学教室に長らく保管されていた。その膨大な資料群を保管することとなった長和町教育委員会は、2014年度から再整理作業に着手し、明治大学黒曜石研究センターは、2017年度から同資料群における黒曜石産地解析を開始している。

男女倉型石器とされた狩猟具・工具に用いられる特殊な石器は、男女倉技法と呼ばれた特徴男女倉型の石槍的な方法で製作された。その特質は、両面調整技術で頑丈な石器を製作することである。石刃と呼ばれる鋭利な石片剥離が旧石器時代の技術革新とされるが、男女倉型石器は鋭利で頑丈な石器への技術革新である。その製作工程には、石刃剥離を基礎とした削片剥離技術があり、石刃技術から両面調整技術への変革を男女倉型石器は示す。男女倉第Ⅲ遺跡を主体とした今後の整理・分析過程で技術革新の姿を究明したい。

男女倉型石器の材料は、遺跡群形成から男女倉川に豊富に存在した黒曜石と当然の如く考えていた。これまでに実施した黒曜石産地解析の結果は、和田産、男女倉産（本沢・ブドウ沢・ツチャ沢、高松沢、牧ヶ沢）が主体であり、豊富な原石を背景とした石器製作遺跡という一般的な理解を示していた。しかし、解析結果はそれに止まらず、男女倉第Ⅲ遺跡の男女倉型石器群では、男女倉谷の河川には存在しない諏訪産黒曜石が、25%程に及ぶ割合で確認された。何故だろう。

男女倉型石器の材料には石刃より厚い板状素材が求められた。原石の打ち割でその素材を得ることは困難であったが、板状の黒曜石転石が男女倉谷の河川で採取できたのである。さらに原石の表面自体が剥離面と同等な板状原石が諏訪産地（星ヶ塔・星ヶ台）には存在していた。諏訪産板状原石は男女倉型石器の最適な材料であったために、男女倉谷の原石に限らず、露頭から剥落した諏訪産板状原石を探索・運搬したと考えられる。

黒曜石原産地における大規模な石器製作遺跡は、豊富に存在する原石を背景とすると考えられてきた。男女倉遺跡群の分析では、原産地における原石獲得行動も単純ではなく、目的とした石器製作によって多様であることが明示されてきた。さらなる分析を重ねて黒曜石原産地遺跡群の多様性についての問題を掘り下げてゆきたい。

「石鏃を中心とする押圧剥離系列石器群の 石材別広域編年の整備」

大工原 豊

本研究は科学研究費助成事業（課題番号25370894）として、平成25年度～平成28年度の4年間実施したものである。縄文時代の石鏃に関する型式設定と広域編年の整備については、これまでほとんど行われたことがなかった。そこで、関東甲信地域を対象として特徴的な石鏃について型式設定し、広域編年を整備することを目的としたものである。



男女倉型の石槍

石鏃型式は土器型式の編年表のように、すべてのマス目が満遍なく埋まるような性格のものではないことが、今回の研究により明らかとなった。特徴的な石鏃がまとまって作られ、型式設定が可能な時期や地域がある一方、ほとんど特徴のない石鏃が作られている時期・地域も存在している。また、草創期・早期では、広域に特徴的な型式の石鏃が散在しており、石鏃型式を追跡することで集団の移動軌跡を把握することができることが予想された。これに対し、晩期では石鏃型式がそれぞれ狭い型式圏を形成しており、地域集団の違いを明らかにするためのツールとして用いることができる可能性が浮かび上がってきた。今後は、本研究での成果を糸口として、さらに広域で特徴的な石鏃を抽出し、型式設定することで、石鏃独自である程度時期決定することが可能となっていくと考えられる。

今回の研究では仮称型式を含め10型式く曾根型長脚鏃（草創期中葉：爪形文段階）、堀込型（早期前葉：撚糸文後半期）、柳久保型（早期中葉：沈線文段階）、（仮称）東長山野型（中期後葉：加曾利E式前半期）、桧の木型（中期末葉～後期前葉：加曾利E3式～堀之内式期）、安通型（晩期前葉：安行3a～3b式期）、茅野型（晩期前葉：安行3a～3b式期）、後谷型（晩期前葉：安行3a～3b式期）、下布田型（晩期中葉：安行3d式期）、（仮称）御社宮司型（晩期中葉～後葉：佐野II式～女鳥羽川式期？）に型式設定することができた。



安通・洞No.2遺跡出土の安通型石鏃の形態

「2018年8月中国南部雲南省ウルシ調査」 能城 修一

8月中旬に中国雲南省でウルシの生育状況と利用状況を理工学部の宮腰哲雄名誉教授と行った。雲南省西北部の怒僱僱族自治州にある標高2200mの高原ではクルミ畑の中にウルシ林が点在していた。現地を案内してくれた西安生漆塗料研究所の張飛龍教授によると、いずれも野生のウルシであって、植えたものはないと

いうことであった。これまで中国で観察したところ、河北省は浅いV字型、湖北省はV字の二本の腕が上下にずれた型、浙江省は椀の断面のような型、雲南省は水平の薄い凸レンズ型と、それぞれ地域によって漆掻きの方法は固定しているように見えた。ところが、今回訪れた高原では水は水平に凸レンズ状に傷をつけて漆液を採取する方法と、河北省のように浅いV字型に傷をつける方法の両方が同じ個体で行われていた。残念ながら、採液採取は数年前に行われており、漆掻き職人に直接確かめることはできず、複数の地域から漆掻き職人が来て、ウルシを掻いている可能性も考えられたが、いずれにしても、今回初めて一地域で二つの方法で漆液採取が行われていることを確認した。また怒江の市街では、ウルシの果皮からは蠟を、種子からは油を採取して利用していることも確認できた。



樹皮に残る掻き傷

「マレーシア：レンゴン溪谷の考古遺跡」 栗島 義明

世界遺産という自然や古い町並、教会や寺院などの宗教施設が指定されている場合が多い。考古関係の遺跡ではエジプトのピラミッド群、イギリスのストーンヘンジや中国西安にある始皇帝陵など巨大な墳墓や荘厳な建造物群を伴っているのが通例であるように感じる。そのような中で純粋に先史考古学の遺跡として、アジア圏では中国の「周口店の北京原人遺跡」やインドネシアの「サンギラン初期人類遺跡」などを思い浮かべることができる。世界遺産の指定を受けたこの二遺跡については訪れた方も多に違いないが、マレーシア中央のイポー市郊外にある「レンゴン溪谷の考古遺跡」についてはあまり知られていないに違いない。昨年度、立ち寄る機会があったので忘れないうちにその概要を紹介しておきたい。

レンゴン溪谷が世界遺産に指定された大きな理由は約12000年前のほぼ完全なPerak Man人骨の出土、東南アジアの旧石器を代表するKota Tampan遺跡などの遺跡群が狭い溪谷沿いに集中して存在する点にある。前者は形質的にも興味深い人骨（埋葬）資料であり、後者は1938年に発見されて以後アジア地域に普遍的な礫器インダストリーの指標的遺跡とされていた。石器製作跡であることからこれまでに5万点以上に及ぶ多量の石器が発見されてきたものの、年代については不明で3万年前とする意見が多かった。しかし、近年の再調査でスマトラ島のトバ火山起源の軽石・火山灰（75,000年前）が石器群の上面を覆うことが判明し、長らくの論争に決着がついたことでも有名である。

このレンゴン溪谷の遺跡群の中でも特に注目されるのが近年発見されたBukit Bunuh遺跡で、ここからは183万年前の隕石衝突で生成されたスエバイトという岩石の中に、恰も封じ込まれた状



石塊の中に封じ込まれた旧石器（ハンドアックス）

態でハンドアックスや剥片などの石器が発見されている。確かに一瞥すると礫岩のような石塊中に、石英製の石器群が固まった状態で包含されているのが確認された。この遺跡については石器群の性格、遺跡の年代他、幾つかの疑問も呈されているようであるが、150万年に近いジャワ原人の年代や、グルジアのドマニシ遺跡で確認された180万年前の人骨など、ユーラシア大陸への人類拡散の年代からすれば肯首されるものかも知れない。また最近では中国西安市郊外で210万年前の地層から石器が出土するなど、ユーラシアやアジア地域への人類拡散の問題は興味が尽きない。

ここで紹介したレンゴン溪谷の資料はクアラルンプルの国立博物館、そして現地の仮設博物館に展示されているが、Bukit Bunuh遺跡の資料については現地博物館（仮設）でのみ見学可能となっている。念のため……。

● 開催予定シンポジウム

◆ 「ナイフ・石鏃・磨製石斧 — 石材資源とその流通 —」

日時▶ 2018年12月8日(土) 9:30 ~ 17:00

会場▶ 明治大学リバティタワー…1083教室

I 石材獲得と流通【司会 島田】

- 日本海を下る黒曜石 赤星純平(秋田県埋文文化財センター)
- 海を渡る黒曜石…池谷 信之(明治大学)
- サヌカイトの採掘と流通…絹川一徳(かながわ考古財団)
- 下呂石の産状と流通…馬場 伸一郎(下呂市教育委員会)
- 九州の黒曜石…杉原 敏之(福岡県教育委員会)

II 石斧素材の獲得【司会 須藤】

- 透閃石岩…中村 由克(下仁田町自然史博)
- 蛇紋岩…松村 和男(群馬県埋蔵文化財調査事業団)
- 緑色岩…栗島 義明(明治大学)

III 石器製作と石材【司会 栗島】

- ナイフ形石器製作と石材利用…島田 和高(明治大学)
- 旧石器時代初頭の石斧と石材…須藤 隆司(明治大学)

IV 討 論「石器素材の開発と流通」【司会 栗島】

◆ 「トチの実加工場は存在したのか？」

日時▶ 2019年2月9日(土) 9:30 ~ 17:00

会場▶ 明治大学グローバルフロント1F 多目的室

I 縄文時代の木組遺構

- 寺野東遺跡…江原 英(栃木県埋蔵文化財センター)

- 長野市大清水遺跡…中沢 道彦(長野県庁)
- 平安時代の木組遺構…杉野森 淳子(青森県立郷土館)
- 茨城県栗島遺跡…奥沢 哲也(つくば市立荃崎第二小学校)
- 木組遺構に用いられた樹木…能城 修一(明治大学)

II 赤山陣屋遺跡とトチの実加工場

- 「トチの実加工場跡」の遺構と土器
…宮内 慶介(飯能市教育委員会)・
吉岡 卓真(さいたま市教育委員会)
- 「トチ塚」に残されたトチ…吉川 純子(古代の森研究舎)
- 赤山遺跡の木組遺構を考える…栗島 義明(明治大学)

III 討 論 「トチの実加工場は存在したのか？」

編集後記

本誌も10号を迎えることができました。今後も黒曜石研究センターの様々な行事は無論のこと、センター員の研究成果や最新の考古学情報なども紹介したいと考えています。また、明治大学黒曜石研究センターがあります、長野県や長和町との共催事業等についても積極的に取り上げて、より連携を強めると同時にその幅を広げていきたいと思っております(栗島)。



8月26日に開催された「黒曜石のふるさと祭り」
(上:開催宣言をする羽田長和町長 下:「黒曜石の森のコンサート」の様子)

明治大学黒曜石研究センターニュースレター 第10号

発行日: 2018年11月20日

編集: 栗島 義明

デザイン: 眞島 英壽

発行: 明治大学黒曜石研究センター

〒101-8301

東京都千代田区神田駿河台1-1

明治大学 駿河台キャンパス 猿楽町第3校舎

電話: 03-3296-4424

URL: <http://www.meiji.ac.jp/cols/>

https://www.facebook.com/明治大学黒曜石研究センター-564680010333699/?notif_t=page_fan

印刷: 中澤印刷株式会社

〒386-0002

長野県上田市住吉1-6

電話: 0268-22-0126



*当センターでは施設の固有名称として「黒曜石」の表記を使用しています。